静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第54集

矢崎遺跡

平成５年度大津谷川単年災害復旧に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９４

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第54集

矢崎遺跡

平成５年度大津谷川単年災害復旧に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９４

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

矢崎遺跡は大津谷川の災害復旧工事に伴う事前調査として、平成５年度に発掘調査を実施したものである。

本遺跡は島田市の北部を流れる大津谷川の中流域に位置する落合地区に営まれた古代末から中世にかけての水田跡である。島田市域における水田跡としては、平成３年度に島田市教育委員会によって調査された、本遺跡の北方に位置する上反方遺跡の鎌倉時代以降と考えられる例があるが、それに次ぐ２例目のものである。また、時期的にも上反方遺跡のものよりも古いものと考えられるなど貴重な調査結果を得ることができた。

現在、志太平野においては中世の遺跡についての発掘例は決して多いとは言えず、未解明な部分が多い。当研究所では矢崎遺跡の調査と併行して同じ大津谷川流域で石成遺跡の発掘調査を実施しており、ほぼ同じ時期の集落と水田という性格の異なる２つの遺跡の発掘成果を得ることができた。今回の成果は大津谷川流域における古代から中世の遺跡の在り方を検討するうえでも貴重な資料を提供することとなった。

調査の実施ならびに報告書の作成にあたっては、静岡県島田土木事務所・静岡県教育委員会・島田市教育委員会の各位に、多大の援助・協力を得ている。ここに、関係各位に深謝の意を表す。

1994年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　斎藤　忠

例　　言

1．本書は、島田市落合地先に所在する矢崎遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、平成５年度大津谷川河川災害復旧（臨時河川整備合併）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県島田土木事務所からの委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。現地発掘調査は平成５年９月から11月まで実施し、その後平成６年３月31日まで資料整理・報告書作成を行った。
3．調査の体制は次のとおりである。
所長　斎藤　忠、常務理事　鈴木　勲、調査研究部長　植松章八、調査研究三課長　佐野五十三、調査研究員　中鉢賢治、鈴木正悟
4．本書の執筆は担当者が分担した。執筆者は次のとおりである。
Ⅰ・Ⅳ(第２節)・Ⅴ……中鉢賢治
Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(第１節)・Ⅴ……鈴木正悟
5．発掘調査にあたりプラント・オパール分析を㈱古環境研究所に委託し、その結果は附編として掲載した。
6．発掘調査資料はすべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
7．本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たった。
8．本書の作成にあたり、隣接地域の発掘調査・出土土器について島田市教育委員会には大変お世話になった。記して厚くお礼申し上げる。

目　　次

序
例　　言
第Ⅰ章　はじめに …… 1
第Ⅱ章　位置と環境 …… 1
参考文献
第Ⅲ章　調査の概要 …… 5
第１節　調査の方法
第２節　調査の経過
第３節　基本層序
第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 8
第１節　遺　　構
第２節　遺　　物
第Ⅴ章　ま と め …… 14
附　編　プラント・オパール分析結果について …… 15

挿図・挿表目次

第１図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 …… 2
第２図　矢崎遺跡周辺の地形図…… 3
第３図　矢崎遺跡グリッド配置図 …… 5
第４図　土層柱状図 …… 7
第５図　ＳＤ０１平面実測図 …… 8
第６図　矢崎遺跡遺構全体図 …… 9・10
第７図　10層水田平面実測図 …… 11
第８図　13層水田杭列平面実測図 …… 12
第９図　出土土器実測図 …… 13
第１表　周辺遺跡地名表 …… 2

図 版 目 次

図版１　遺跡周辺環境（空中写真）
図版２　１　遺跡遠景（北から）
　　２　遺跡調査前風景（南から）
図版３　１　ＳＤ０１　土層断面（東から）
　　２　ＳＤ０１　完掘状況（東から）
図版４　１　10層水田（第２遺構面）検出状況（南から）
　　２　12層水田（第３遺構面）検出状況（南から）
図版５　１　13層水田（第４遺構面）杭列畦畔解体状況（北から）
　　２　13層水田（第４遺構面）杭列畦畔解体状況　近接（北から）
図版６　１　中・近世遺物集合写真
　　２　小　　碗
　　３　小　　皿

第Ⅰ章　はじめに

矢崎遺跡は1989年発行の『静岡県文化財地図Ⅱ』（以下『地図Ⅱ』）にも掲載されていない新発見の遺跡である。平成５年度に大津谷川と尾川の合流点付近で実施する河川災害復旧工事が行われることになったが、工事予定箇所付近から遺物が採集されていることから、静岡県教育委員会文化課と静岡県島田土木事務所が協議を行い、確認調査を実施することになった。平成５年１月に２箇所の試掘坑による調査を行った結果、本遺跡は集落の縁辺部にあたり、溝状遺構と重複する水田が存在することを確認し、本調査が必要であるとの結論を得た。その際、同時期に試掘を行った下流の石成遺跡とは連続せず、別個の遺跡と考えられることから、所在地の地籍をもとに矢崎遺跡と呼称した。

平成５年度事業として静岡県教育委員会文化課の指導のもとに㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所が本調査にあたることとなった。

現地発掘調査は、平成５年９月から11月まで実施し、その後資料整理・報告書作成を行い平成６年３月をもって平成５年度の矢崎遺跡にかかわるすべての事業を終了した。

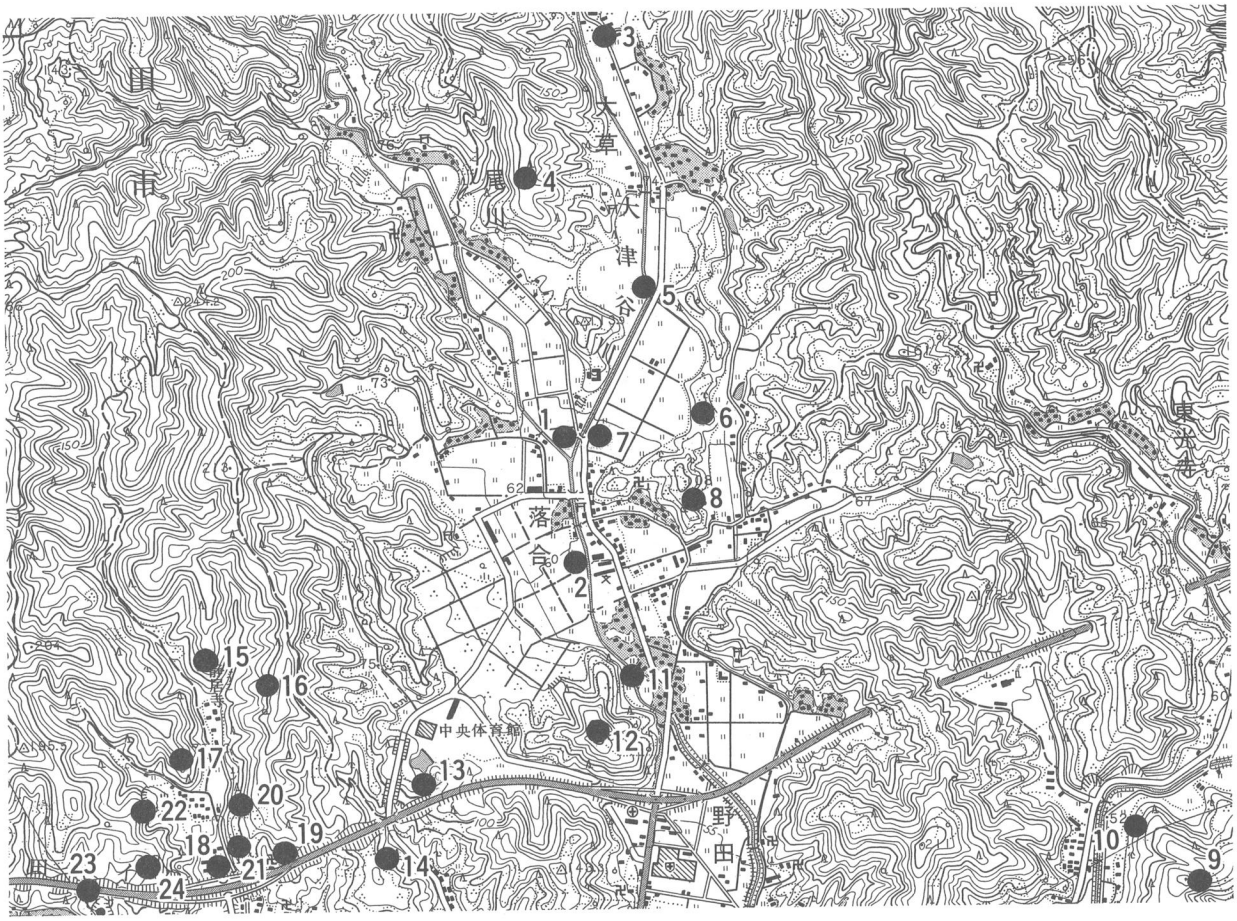
第Ⅱ章　位置と環境

矢崎遺跡は、島田市の中心部から北方約３㎞のところ、島田市の北部標高496ｍの千葉山麓を水源とする大津谷川と、同じく千葉山の西南を発する尾川とが合流する部分に立地する。遺跡のある島田市の北部地域は、前述の大津谷川・尾川と伊太谷川・東光寺谷川・相賀谷川・伊久美川が島田市北部に広がる瀬戸川層群静居寺層と呼ばれる頁岩で形成された標高200～300ｍ級の丘陵を解析した小規模の谷底平野が入り組む地形である。南の市街地部分には、日本有数の大河川・大井川が赤石山脈から南に穿入・蛇行しながら流れ、金谷町横岡付近から東には、大井川扇状地のシルト・粘土の薄い互層に覆われた砂質・礫質が広がる地形が連なる。

矢崎遺跡の存する島田市落合地区は、前述の島田市北部の丘陵が解析された幾つかの谷のうち、大津谷川によって形成された標高60ｍ前後の谷底平野であり、遺跡周辺には大津谷川・尾川に解析された丘陵部の先端が東西北方から張り出しており、変化に富んだ景観をつくり出している。両河川に運搬された泥炭堆積物が形成する平野部は北から南にかけて緩やかに傾斜しており、現在、ほとんどの部分は水田として利用されており、集落は丘陵の裾部に群在している。

次に島田市域の遺跡は『地図Ⅱ』によるとおよそ160箇所が数えられる。遺跡の分布域は前述の北部の低丘陵部を解析している各流域と大井川右岸の湯日川流域に分けられる。このうち、矢崎遺跡は大津谷川流域の遺跡群に含まれており、大津谷川流域に分布する遺跡は時代ごとに概観すると次のようである。

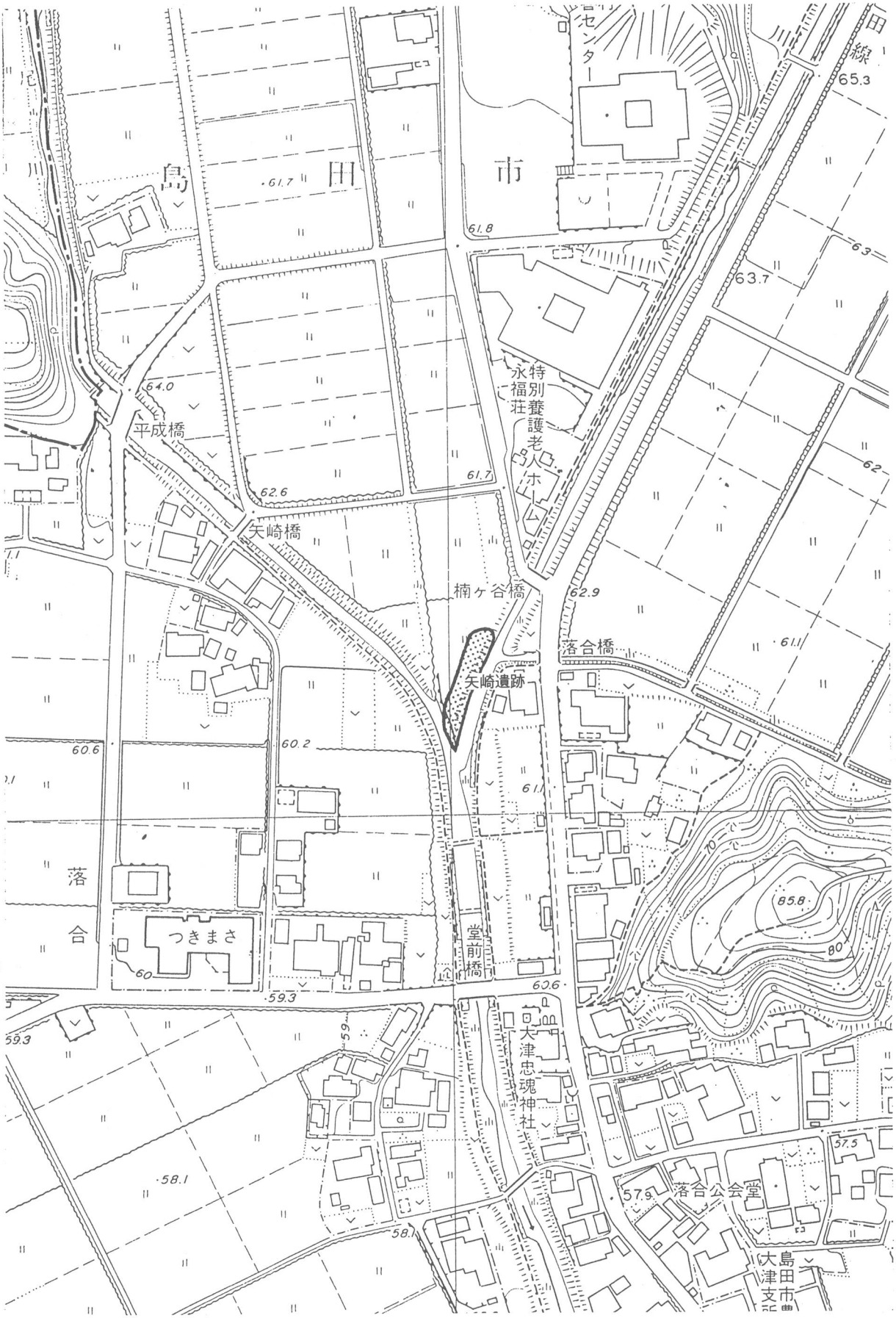
まず、縄文時代の遺跡として、山王前遺跡、尾川平遺跡、広段遺跡、波田遺跡、波田Ｄ－Ⅲ遺跡等があげられる。これらは山王前遺跡、尾川平遺跡をのぞいて、いずれも大津谷川流域の丘陵部に立地している。山王前遺跡からは早期の土器群をはじめ、前期後半、中期、後期等の土器が出土している。波田



第１図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図（１：25,000）

	遺跡名	時代	種別	遺構・遺物	備考
1	矢崎遺跡	古代・中世	水田	畦畔・陶質土器	平成５年調査
2	石成遺跡	古代・中世	集落	掘立柱建物跡・杭列・陶質土器	平成５年調査
3	上反方遺跡	古代・中世	集落・水田	畦畔・杭列・陶質土器	平成３・４・６年調査
4	大津城	中世	城館	物見跡・自然堀	
5	仲山経塚	中世		陶質土器	
6	菅ヶ谷Ａ地点遺跡	古代・中世	古窯	須恵器	
7	落合遺跡	中世	集落		
8	菅ヶ谷Ｂ地点古窯	古代・中世	古窯	須恵器	
9	岸城	中世	城館	城砦	
10	東山遺跡	弥生・中世	集落	住居跡・弥生土器・山茶碗	一部残　昭和62年調査
11	居倉遺跡	古代・近世	集落	陶磁器・陶質土器・貨幣・鉄鏃	昭和59・60年調査
12	野田城	中世	城跡	堀・曲輪跡	
13	田ノ谷遺跡	縄文・弥生・古墳	集落	縄文土器・弥生土器・須恵器	一部残　昭和50・57年調査
14	菰ヶ谷古窯	古代	古窯		
15	静居寺裏古窯	古代	古窯	陶質土器	
16	大観堂遺跡	近世	散布地		
17	静居寺前Ｃ地点古窯	古代・中世	古窯		
18	旗指遺跡	縄文・古墳・古代・中世	集落・古窯	竪穴住居・縄文土器・弥生土器	一部残　昭和48・49・60・61年調査
19	旗指８地点古窯	古代	古窯	陶器	一部残　昭和48年調査
20	静居寺前Ａ地点古窯	古代	古窯		
21	旗指７地点古窯	古代	古窯		
22	静居寺前Ｄ地点古窯	古代・中世	古窯		
23	旗指６地点古窯	古代	古窯		
24	旗指４地点古窯	縄文・古代	散布地・古窯	縄文土器・石鏃・陶器・工房跡	一部残　昭和49・60年調査

第１表　周辺遺跡地名表（『静岡県文化財地図 Ⅱ 』1989より作成）



第２図　矢崎遺跡周辺の地形図（１：2,500）

D－Ⅲ遺跡では、住居跡から中期後半の土器が出土している。広段遺跡、尾川平遺跡からは中期の土器・石器が出土しているが、特に尾川平遺跡の土偶は顔面部が明確な例として注目される資料である。波田遺跡からは表採ではあるが後期の土器・石器が出土している。

次に弥生時代にはいると、中期後半の段階から遺跡が多くなるようであり、山王前遺跡・田ノ谷遺跡が知られている。さらに後期には山王前遺跡（後期の住居跡16軒）、後期から古墳時代まで営まれた田ノ谷遺跡（後期の住居跡６軒・古墳時代前期の住居跡４軒）等からは集落跡が確認され、これらは、いずれも大津谷川右岸の丘陵上に存在している。

古墳時代になるとこの地域は、大津古墳群と呼ばれる総数25基の古墳が造営されており、島田市域のなかでも古墳の分布が密な地域のひとつである。前期には城山１号墳、鳥羽美古墳等が大津谷川右岸丘陵上に築造されており、また、中期の古墳は現在のところ未確認であるが、後期になると大津谷川左岸で、法信寺、二俣、駒形、竜雲寺、波田１～３号墳の各古墳群が、右岸では鵜田古墳群、供方１号墳、山王前１号墳がそれぞれ築造されている。

集落跡では山王前遺跡が弥生時代後期から存続していたことが確認されており、また、田ノ谷遺跡においても前期の住居跡が確認されている。

そして、奈良時代以降については、10世紀の第Ⅱ四半期から伊太の旗指古窯跡が灰釉陶器、山茶碗、山皿の生産を開始しており、12世紀の第Ⅳ四半期まで操業していたものと考えられる。この旗指古窯跡で生産された製品が、大津谷川の川岸にある居倉遺跡、８世紀後半の開創と伝えられ、天台系山岳寺院として今日に至る千葉山の智満寺遺跡及び千葉龍王壇遺跡等から出土している。また、居倉遺跡の北方の大津谷川の右岸に立地する石成遺跡では、溝で区画された掘立柱建物跡とともに東遠系の山茶碗・小皿や常滑・瀬戸の陶器、青・白磁が出土している。これらの遺跡が存立していた時期のこの地域は、『吾妻鏡』文治５年（1189）５月25日条に記載される伊勢神宮の荘園といえる大津御厨に比定される地域でもある。さらに後続するものとして、野田城跡や大津城跡の中世の城跡が立地している。

参考文献

島田市教育委員会　『駒形二号墳発掘調査概報』 1987
島田市教育委員会　『城山古墳調査概報』 1980
島田市教育委員会　『波田１号墳 馬平遺跡』 1980
島田市教育委員会　『旗指古窯跡発掘調査概報』 1980
島田市教育委員会　『尾川平遺跡発掘調査概報』 1981
島田市教育委員会　『旗指古窯跡発掘調査概報Ⅱ』 1981
島田市教育委員会　『山王前遺跡発掘調査概報』 1982
島田市教育委員会　『千葉山智満寺庭園』 1984
島田市教育委員会　『居倉遺跡』 1984
島田市教育委員会　『田ノ谷遺跡』 1985
島田市教育委員会　『居倉遺跡』 1987
島田市役所　『島田市史』 上巻 1978
静岡県教育委員会　『静岡県文化財地図Ⅱ』 1989

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の方法

発掘調査対象地の範囲は、340㎡ほどあり、この全面に10ｍ×10ｍのグリッドを設定した。グリッドは北から南にアルファベッドでＡ～Ｃとし、西から東にはアラビア数字を用い１、２、３…と表記した。なお、グリッド軸（南北）線はＮ－22°－9′－46″である。基準杭は調査区任意で設定し、両端の杭の国家座標を測量した。その値は第３図に記した。

調査の実施に先立ち、排土置き場の確保が必要となり調査区西側の休耕田を借用することになった。その際に借用地の今後の水田としての使用と排土の埋め戻しも考慮して、調査区内の現行水田耕作土と以下に堆積する粘土・砂礫層の分別が必要となった。そのため現耕作土を30㎝ほど除去して借用地に広げた後、ブルーシートで養生し、その上に中間層を仮置きすることになった。

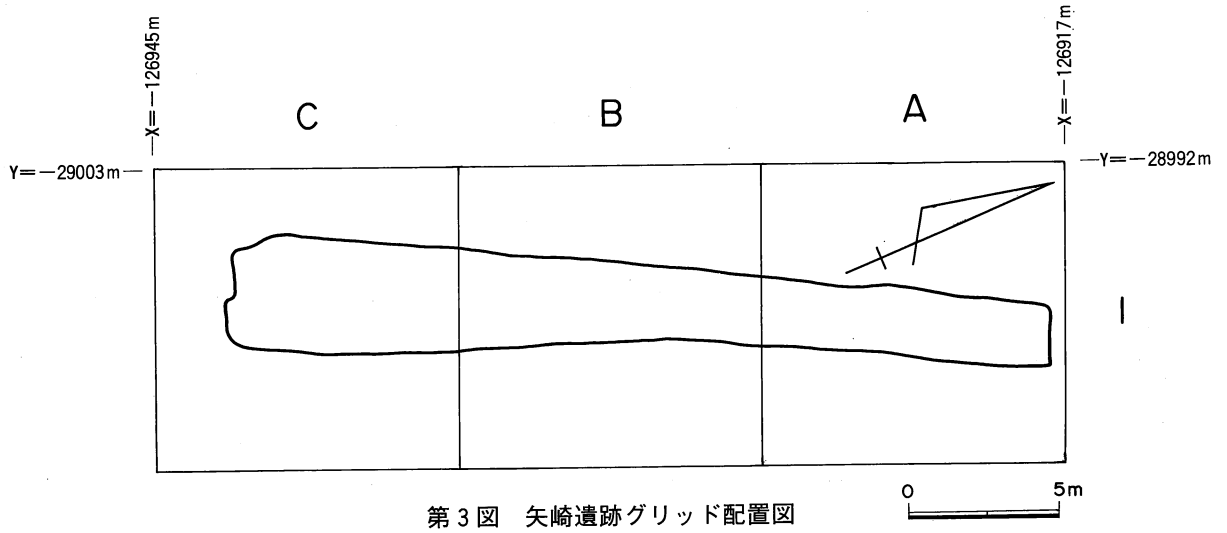
発掘調査の排土は、表土及び中間層の除去を建設用重機で行い、前述の調査区西側の借用地に仮置きした。その後、遺構検出面までの掘削、遺構・遺物の検出については手掘りで行うことにし、その際に出る排土については、ベルトコンベアをＬ字１列に設置し、排土置き場に運び出した。また、土層観察ならびに排水施設として、調査区南端の県教委の試掘坑と同じ場所に集水坑を設定した。

調査区の遺構については、当研究所での整理記号にしたがって溝はＳＤ、小穴はＳＰ、水田の畦畔はＳＫとし、遺構ごとに検出順に通し番号をつけて表記した。また、出土遺物は土器片と杭・横木・横板であり、台帳に登録後、現地にて洗浄・注記を行い、以後は室内にて実測図作成などの整理作業を行うことにした。

遺構平面図の作成にあたっては現地に水糸を張った簡易遣り方を使用し、縮尺はすべて１：20で作成した。土層断面図についても縮尺は１：20に統一した。これらの計測図面はすべてマイクロフィルムの撮影を行いアパチュアカード化して保管することにしている。

現地調査での写真撮影は、６×７版のカメラと35㎜のカメラを使用した。そして、遺構の撮影には６×７版と35㎜の白黒写真と35㎜のカラースライドを用い、現地調査の作業工程記録用としては35㎜のカラーネガを併せて用いた。また、調査区全景の写真撮影には３段に組んだローリングタワーを利用した。

また、今後の志太地区における低湿地遺跡の調査にあたってデータの蓄積をはかるためプラント・オパール分析を古環境研究所に委託した。



第３図　矢崎遺跡グリッド配置図

第２節　調査の経過

現地調査に先立ち、８月の半ばより調査範囲の確認・設定、調査区内の草刈・水抜きを単発的に行った。また、９月に入り、10日までには配電盤の設営、ベルトコンベアの搬入、排土置場の養生などの準備を終え発掘調査に臨んだ。

現地の発掘調査は、平成５年９月13日(月)に開始され同年11月26日(金)に終了するまでの約３ケ月にわたって実施された。以下、日を追って経過を述べることにする。

９月

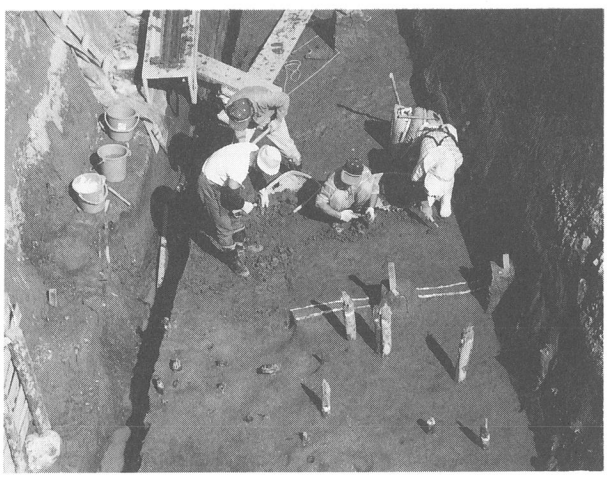
建設用重機による表土及び中間層の除去ならびに法面の養生、集水坑・排水溝の掘削を16日までに終了した。表土及び中間層の除去後の調査区の状況は、法面に礫が詰まった旧河道の断面が数箇所に見られ、一部に滲水している箇所も見られた。また、調査面には旧河道による攪乱が及んでいる箇所がＡ－１グリッドとＣ－１グリッドの２箇所に確認された。このうちＡ－１グリッドの旧河道は湧水を伴うもので、調査面が軟弱な状況であり、調査面を乾燥させるため表土及び中間層の除去後の数日間を必要とした。24日までにはベルトコンベアをＬ字１列に設置し、掘削準備を整えた。

しかし、調査区の軟弱な状態が依然として続いたため、当初、調査区の狭小さを考慮して北側と西側のみに幅50㎝で設定した排水溝の幅を広げ、さらに深く掘削した。加えて、調査区の東側にも排水溝をあらたに掘削して効果を待った。28日に基本土層とした集水坑西壁の土層断面図の作成・写真撮影を行い、30日から調査面の状態が安定しているＣ－１グリッドの南側から第１遺構面の遺構の精査検出を行った。その結果、Ｃ－１グリッドで中世の溝ＳＤ０１が検出され、土層断面の実測、続いて完掘、写真撮影を行った。

10月

遺構検出作業を継続した。その結果、前述のＣ－１グリッドで護岸用の杭列（上部は重機による表土除去の際に削除している）を伴う旧河道の底部が確認された。平面形態を検出した後、土層帯を残しながら掘削を行った。旧河道内からは山茶碗の破片等が多く出土し、土層断面の観察から数層に分層され、最下層から明治以降の遺物が出土したため、旧河道については明治以降の河道であると判断した。12日に調査区の南北中心線に仮設のグリッド杭を５ｍ間隔に打設した。14日から旧河道の北側の遺構精査を行い、20日には第１遺構面の遺構全景の写真撮影を行った。また、28日までには平面実測を終了した。

表土除去



発掘作業

11月

調査面を掘り下げて、第２遺構面の遺構検出を行った。その結果、Ｃ－１グリッドの一部で水田の畦畔が確認されたが、調査区の他の部分では確認できなかった。４日までには土層断面・平面図の実測、遺構の写真撮影を終えた。５日から第３遺構面の検出のため、調査面を掘り下げた。そして、16日までに水田の畦畔を検出し、17日・18日の両日で写真撮影・平面実測を行った。18日から第４遺構面の調査に入った。第４遺構面の遺構も水田の畦畔であった。土層断面の観察から畦畔の高まりを平面的に検出するのは困難だったため、直接畦畔を解体して杭列の検出を行った。26日までに写真撮影・平面実測・遺物の取り上げを終え、調査のすべてを完了した。また、30日までには資器材、コンテナハウス・トイレの撤去を行った。

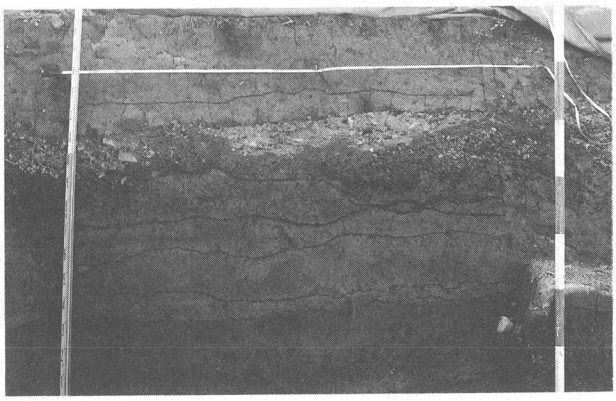
12月

９・10日の両日で調査区の埋め戻し、借用地の復旧作業を行った後、現地の引き渡しを行った。

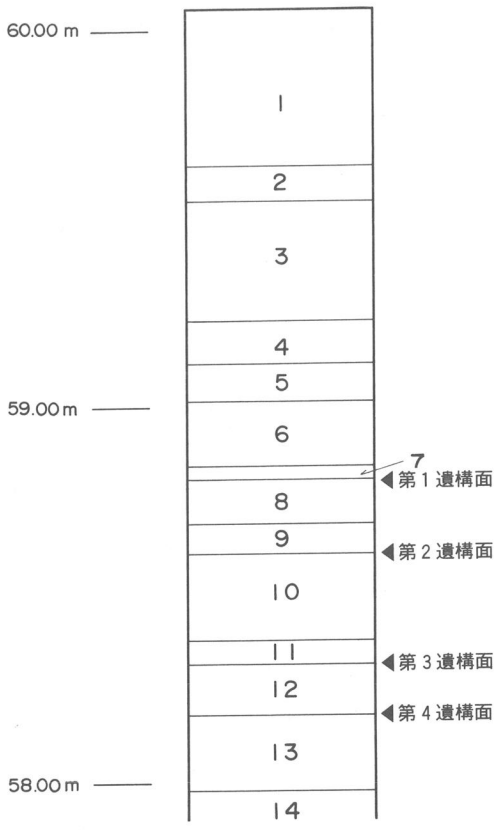
第３節　基本層序

本調査区における基本層序は次の通りである。現地表面から順にアラビア数字をつけ、それを細分するする形で基本土層とした。基本土層とした箇所は、調査区の南端の集水坑西壁にあたる部分である。以下、それぞれの層について簡単に記載する。

1…表土
2…暗褐灰色シルト
3…黄褐色砂礫
4…緑色砂
5…暗灰緑色粘性シルト
6…暗灰色砂質シルト
7…緑灰色粘土
8…黒色粘土：第１遺構面
9…灰色粘土
10…灰色粘土混じり緑灰色砂礫：第２遺構面
11…暗灰色細砂
12…砂混じり灰色粘土：第３遺構面
13…暗褐色粘土混じり灰色粘土：第４遺構面
14…暗灰色砂礫



土層断面



第４図　土層柱状図

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　遺　　構

第１遺構面

基本層序の８層：黒色粘土上で検出された遺構は、調査区の南端で検出された溝１条である。調査区の北側（Ａ－１グリッド）は調査区を東西に走る幅４ｍほどの旧河道によって壊されており、また、その部分からの湧水も激しく調査面が軟弱な状態が解消されず、遺構の検出は不可能であった。調査区の中央部（Ｂ－１グリッド）も湧水こそなかったものの、やはり後世の護岸施設を伴う明治以降の旧河道と数条の溝によって削平されており、当該面での遺構は確認できなかった。

ＳＤ０１（第５図）

Ｃ－１グリッドの集水坑の西側で検出された幅47～50㎝、深さは最深部で10㎝を測る浅い溝である。断面形態は第５図のように東側で急勾配を呈し、西側では緩やかに立ち上がる。覆土は２分層され、上層は炭化物が水平堆積し、粘性も強い緑灰色粘土で、下層は粒径２～３㎜の還元され緑褐色化した粗砂である。遺物の出土はない。検出できた範囲は一部分であり、南から北東に向かって緩やかな曲線を描いている。南側は調査区外へ延びており、北側は明治以降の旧河道によって切られていたものと考えられる。また、水の流れた方向は、溝内の標高値に差異は見られず、確証はないが周辺の河川等の状況から北から南へ向かって流れていたものと考えられる。

第２遺構面

基本層序の10層：灰色粘土混じりの緑灰色砂礫上で検出された遺構は、調査区南部のＣ－１グリッドで水田の畦畔２条と小穴１基である。

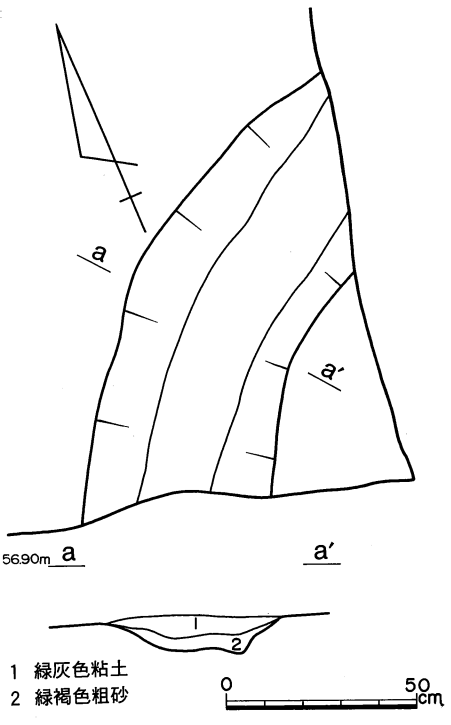
ＳＫ０１・０２（第７図）

９層の灰色粘土に被覆された杭列を伴わない畦畔である。

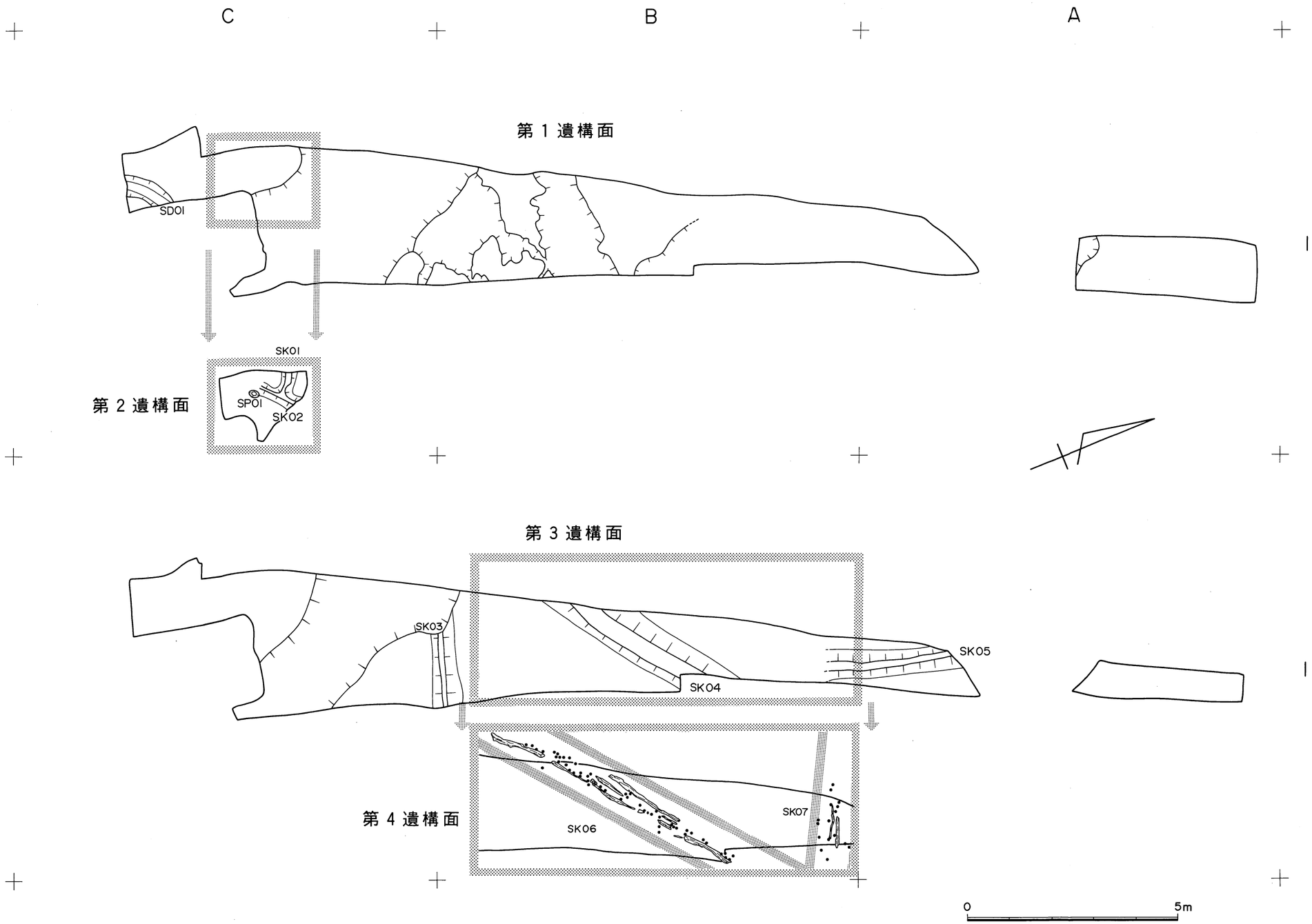
ＳＫ０１は、Ｎ58°Ｗ方向に延びる東西畦畔で、下端幅30～40㎝、上端幅約14㎝、高さ約７㎝を測る。検出長は40㎝ほどであるが、西側に向かって延びていたものと考えられる。断面形態は台形を呈し、遺物は出土していない。

ＳＫ０２は、Ｎ47°Ｅ方向に延びる南北畦畔で、下端幅50～80㎝、上端幅約８㎝、高さ６～８㎝を測る。検出長は90㎝ほどである。断面形態は台形である。畦畔は北側に向かって延びていたものと考えられるが、明治以降の旧河道に切られていた。また、南側は畦畔の高まりが緩やかに低くなっていき、ついには終息してしまっている。ＳＫ０１同様、遺物は出土しなかった。

検出できた範囲は狭小ではあったが、第７図のように２条の畦畔の交点を確認することができた。ＳＫ０２は、前述のように北側が旧河道によって切られていた。このことから少なくともここまで延びていたことは確実であるが、それより北側では畦畔の高まりは確認できなかった。このことは旧河



第５図　ＳＤ０１平面実測図



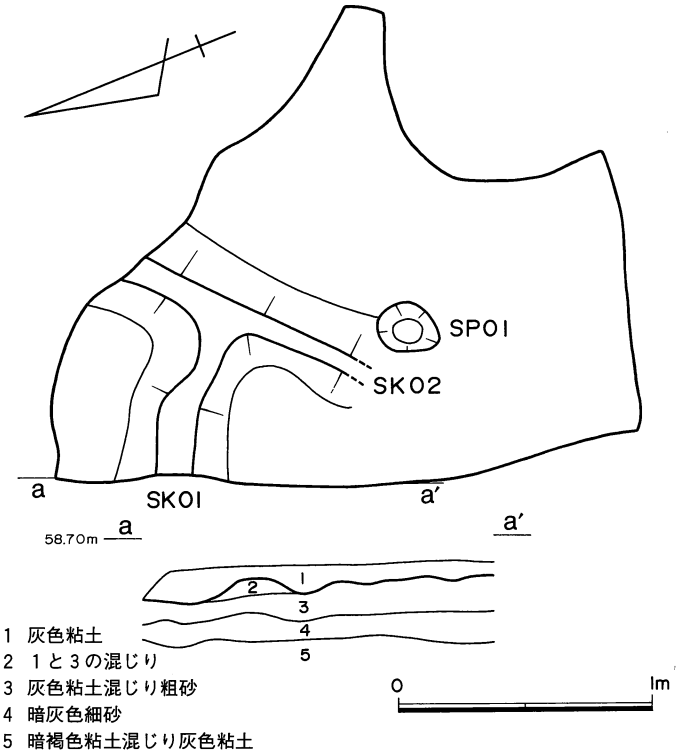
第 6 図　矢崎遺跡遺構全体図

道の北側で、遺構確認面である粘土混じりの砂礫層が薄い堆積状況であったことと関係するのではないだろうか。そうだとするとこの付近で畦畔は終息しており、水田が経営された時期には、この周辺が水田経営の境界付近だったことも考えられる。

ＳＰ０１（第７図）

ＳＫ０２が終息する部分で検出された小穴で、平面形態は、ほぼ円形で径18～20㎝、深さ10㎝を測る。覆土は黒色粘土である。遺物は出土していない。

以上、第２遺構面で確認した遺構の時期は不明である。



第７図　10層水田（第２遺構面）平面実測図

第３遺構面

基本層序の12層：砂混じり灰色粘土上で検出された遺構は、調査区のほぼ全域にわたって検出された水田の畦畔３条である。

ＳＫ０３・０４・０５（第６図）

いずれも11層の暗灰色細砂に被覆された杭列を伴わない畦畔である。

ＳＫ０３は、Ｂ・Ｃ－１グリッドで検出されたＮ73°Ｗ方向に延びる東西畦畔で、下端幅60～70㎝、上端幅10㎝、高さ６～８㎝を測る。検出長は２ｍほどである。断面形態は上端と下端の比率が１：６～７の緩やかな台形を呈する。解体後の畦畔からは遺物は出土していない。畦畔は、東は調査区外に向かって延びており、西は明治以降の旧河道によって切られてしまってはいるが、東と同様に調査区外に延びていたと考えられる。

ＳＫ０４は、Ｂ－１グリッドで検出されたＮ55°Ｅ方向に延びる南北畦畔で、下端幅１～1.1ｍ、上端幅40～45㎝、高さ８～10㎝を測る。検出長は４ｍほどである。断面形態は台形を呈する。畦畔は、両方向とも調査区外に向かって延びている。この畦畔は他２条の畦畔に比較して幅も大きく、後述する第４遺構面で検出された畦畔を踏襲していることはあきらかであり、水田の造成において基本となる畦畔ではなかったかと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ０５はＡ・Ｂ－１グリッドで検出されたＮ17°Ｅ方向に延びる南北畦畔で、下端幅60～70㎝、上端幅15～20㎝、高さ８～10㎝を測る。検出長は3.2ｍほどである。畦断面形態は緩やかな台形を呈する。畦畔は第６図の通り、北は湧水を伴う明治以降の旧河道に切られてはいるが、調査区外に延長していたと推定される。南は畦畔の高まりが緩やかに低くなっていき、ついには終息している。

この水田の時期についても水田面及び畦畔からの土器等の出土遺物は伴わず、第２遺構面と同様に不明である。

第４遺構面

基本層序の13層：暗褐色粘土混じり灰色粘土上で検出された遺構は、調査区の中央域Ｂ－１グリッドで検出された水田の畦畔２条である。

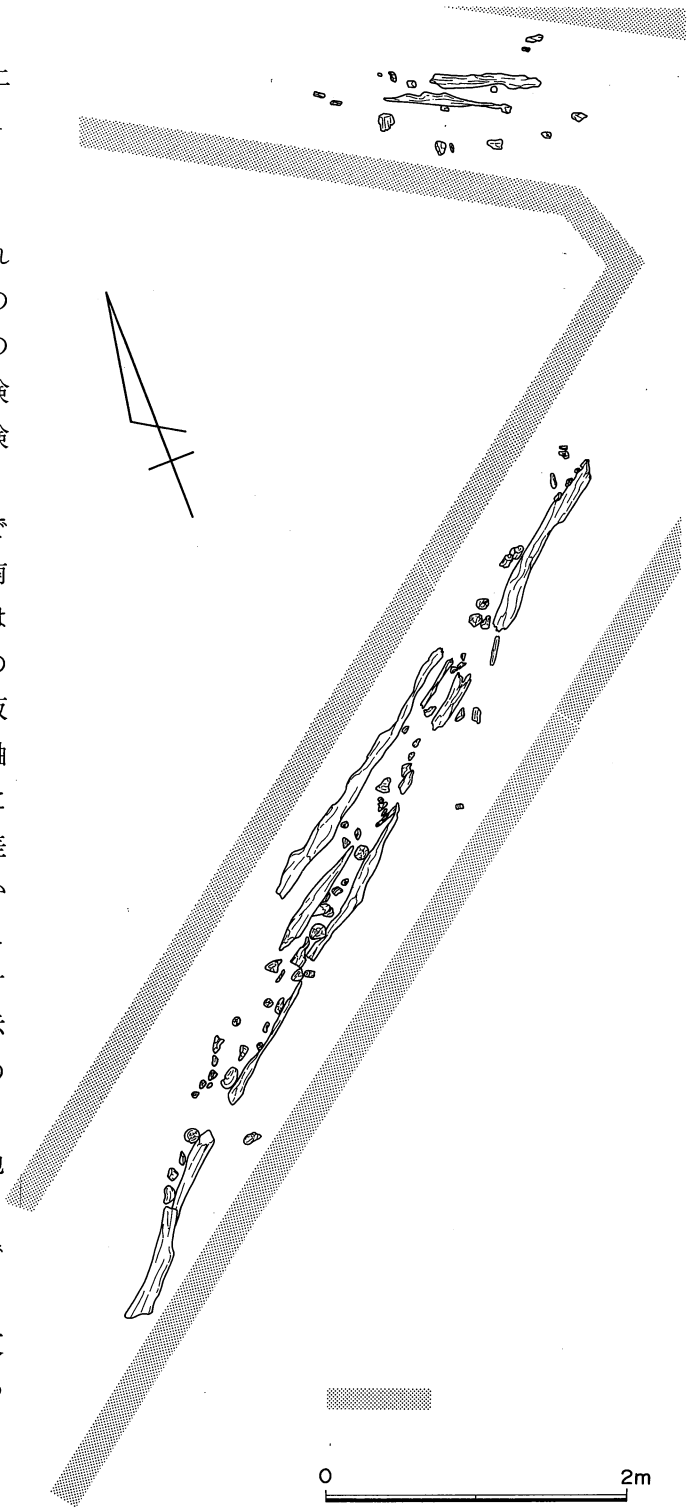
ＳＫ０６・０７（第８図）

いずれも12層の砂混じり灰色粘土に被覆された杭列畦畔である。検出に際しての土層断面の観察では、12層水田の畦畔による圧密で畦畔の高まりが確認できない状況であり、平面での検出が困難なため、直接畦畔を解体して杭列を検出した。

ＳＫ０６はＮ52°Ｅ方向に延びる南北畦畔である。検出長は6.5ｍほどである。畦畔は、南北ともに調査区外に向かって延びている。杭は基本的には径約10㎝、長さ90㎝～1.2ｍほどのものが約１ｍ間隔で打たれており、横木・横板は１～２ｍのものが使用されている。この基軸に径５～10㎝、長さ50㎝～１ｍの杭が不規則に打ち込まれている。はたしてこの畦畔に時期差があり補強されたものかどうかは判断できなかった。遺物としては、畦畔中から刺突紋が施こされた弥生時代後期の壺の肩部とみられる破片１片が出土しているが、これが水田の時期を示すものか否か明確にできなかった。また、この畦畔は前述の第３遺構面で確認されたＳＫ０４に継承された畦畔であり、水田造成時には土地区画の基軸となったものと考えられる。

ＳＫ０７はＮ62°Ｗ方向に延びる東西畦畔である。検出長は１ｍである。畦畔は、東西ともに調査区外に向かって延びている。このうち東側に延びる部分は、調査区外でＳＫ０７と交わるものと考えられる。

この水田の時期も不明である。



第８図　13層水田（第４遺構面）杭列平面実測図

第２節　遺　　物

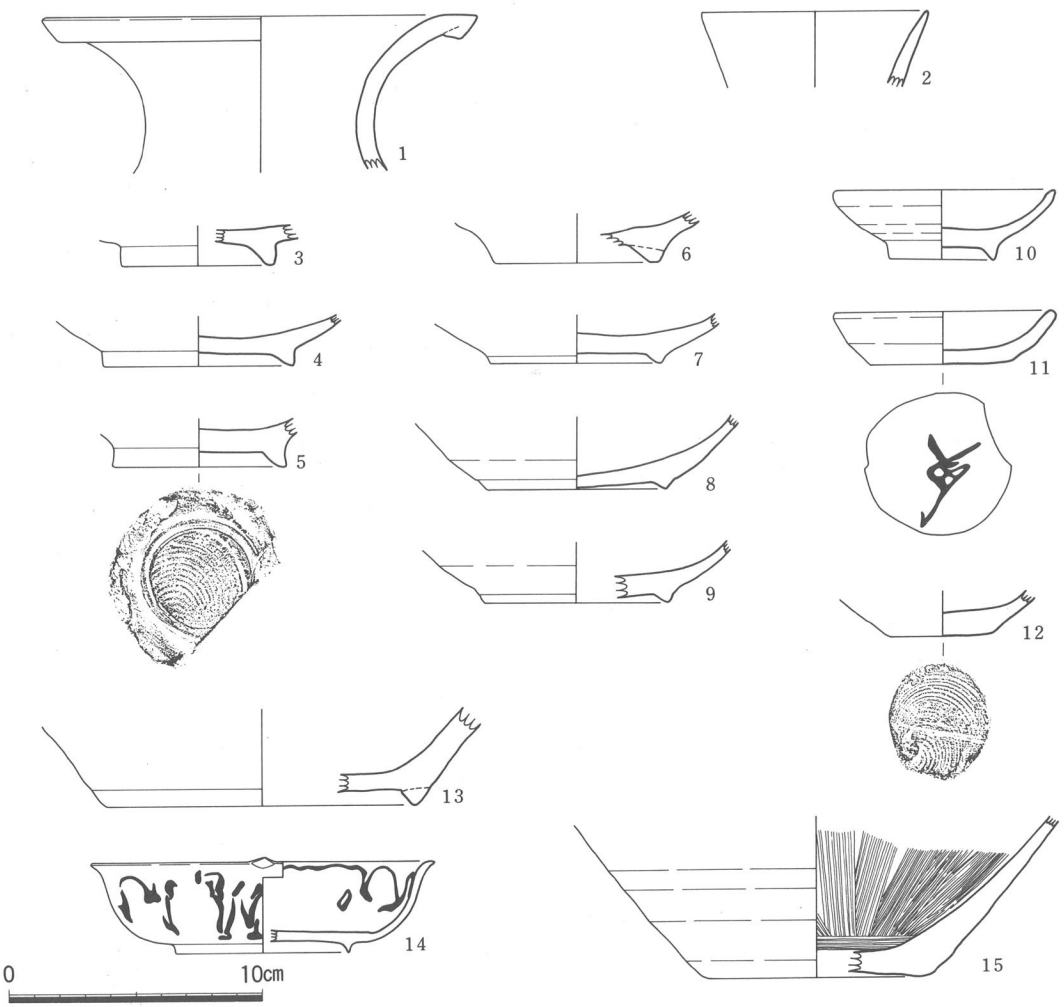
矢崎遺跡から出土した遺物は、杭を除いて、土器のみである。ほとんどが小片であり、また遺構に伴ったものは少なく、多くは上層から遺構検出面を切り込んでいる旧河道および溝からの出土である。

１は壺の口縁部である。頸部から大きく外反するもので、幅広の粘土帯を貼り付ける折り返し口縁で

ある。摩滅が非常に激しく、調整・文様は不明である。胎土は粗く、石英・長石・赤色チャートを多く含んでいる。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものである。２は坩の口縁部で、直線的に立ち上がるものである。胎土は緻密で、長石・赤色チャートを多く含んでいる。

３～９は山茶碗である。底部の破片のみであるため、高台の形態から大きく２つに分類した。１類はやや大きめの三角形高台で、３～６が該当する。基本的には端部が鋭さを欠いており、丸味を帯びるか偏平となっている。６を除いて高台端部が接合部からほぼ垂直に下がっている。３・６は小片のため調整は不明だが、糸切り後接合部を撫でており、特に５はヘラ状工具を用いている。２類は高台が低く小さな三角形を呈するもので７～９がそれにあたる。端部の位置は接合部より内側にあり、９を除いて籾圧痕が顕著である。10は小碗である。体部には稜を持たず緩やかに内湾して立ち上がり、口端部は僅かに肥厚している。高台は粗雑でやや歪みが大きいが、三角形様のものである。11・12は小皿で底部は糸切り未調整である。11は完形品である。底部が大きいもので、器壁がやや厚く体部に弱い稜を有している。底部には墨書がなされているが、判読不明である。13は大平鉢である。粗雑な三角形の高台から直線的に体部が立ち上がっている。胎土は粗く長石・黒雲母などを多く含んでいる。湖西・渥美系のものであろう。

14は志戸呂産の小碗（煎茶碗？）である。体部はゆったりと内湾して立ち上がり、口縁部を外方に引き出している。内外面にイチン描きがなされている。15は擂り鉢である。志戸呂産と考えられものであるが、おろし目が非常にはっきりしている。



第９図　出土土器実測図

第Ⅴ章　ま　と　め

今回の発掘調査では３面の水田遺構を検出した。遺物はごく少量であるが弥生時代から近世終末期までの土器を確認することができた。しかし、出土した遺物の多くは明治時代以降と考えられる旧河道からの出土であり、検出した遺構の時期を決定するものではなかった。また、第３遺構面で検出した畦畔の中から弥生時代後期と考えられる土器片が１点出土しているが、これをもって遺構の時期を確定することも極めて困難である。このように遺物による遺構の時期決定ができないという問題点はあるが、調査結果について、若干の考察を行ってみたい。

遺跡の性格について

平成４年度に行われた県教委文化課の試掘においては、遺跡の土地利用について調査区の南から北にかけて傾斜した地形が認められ、さらに溝状遺構の検出状況から南側は集落の縁辺部分であり、それ以北には水田が広がっていた可能性が指摘された。今回の発掘結果からは、試掘の結果通り、南から北への傾斜と第１遺構面の南端で溝状遺構ＳＤ０１を検出した。しかし、それ以北では旧河道など後世の削平により、明確な遺構を確認することはできなかった。第２遺構面以下の遺構の検出状況は、調査区の全域にわたって水田だったことを示している。これらの遺構の年代については、伴出遺物が希薄なため明確ではないが、近接する石成遺跡の出土遺物や土層などを対比した結果、鎌倉時代を前後する時期と考えることができよう。このことから鎌倉時代及びそれ以前には当地域は、低地部分となっており、水田域として利用されていたと推定することができる。しかし、13層（第４遺構面）を除いては稲のプラントオパールはカウントされていないという事実もある。このことはプラントオパールを含む耕作土が流出してしまった可能性を考えざるを得ないが、浜松市箕輪遺跡でも同様の例があり、今後類例を含め、検討していきたい。

周辺遺跡との関係

大津谷川流域においては近年、いくつかの調査が行われ、平安時代から中世にかけての集落跡や水田跡などが検出されている。当遺跡の北方約1.3㎞の県道伊久美元島田線沿いには、鎌倉時代以降と考えられる水田が確認された上反方遺跡がある。両遺跡を比較すると上反方遺跡の水田と当遺跡の水田には土壌的に差異が認められ、さらに上反方遺跡では谷が奥まった丘陵末端部の狭隘な平坦面に方形の区画を伴った水田が造成されていたと考えられるのに対して、当遺跡では比較的広い平坦面に造成された水田であり、島田市北部地域における地勢による水田造成の相違を考える上で貴重な資料を提供したことになる。一方、当遺跡の下流約400ｍに位置する石成遺跡は大津谷川の形成した谷底平野の微高地上に成立した中世の集落跡である。山茶碗を中心とした遺物から時期が決定されているが、当遺跡とは土層も類しており、同じ環境で、ほぼ同時期に存在した遺跡として捉えられる。石成遺跡の北端は旧河道となっており、当遺跡とは連続せず、寸断されていたと考えられる。このことから当遺跡は石成遺跡で確認された集落とは異なり、旧大津谷川を境とした別集落の水田跡と考えることができよう。『地図Ⅱ』には当遺跡に隣接して中世の集落である落合遺跡が示されている。この遺跡の実態は不明であるが、これら集落と水田域との関係、さらに鎌倉時代において大津御厨に比定される地域である点からも、中世の集落景観の復元等、今後の課題は多いといえよう。

附編　プラントオパール分析結果について(抄)

古環境研究所

1．はじめに　(略)
2．試　　料
3．分 析 法　(略)
4．分析結果
5．考　　察
6．ま と め

2．試料　調査地点は、試掘坑１地点である。土層は１層～14層に分層された。試料は、このうちの４層～13層について遺跡の調査担当者によって採取され、当研究所に送付されたものである。図１に、土層断面図と分析試料の採取箇所を示す。

4．分析結果　試料１ｇ中のプラント・オパール個数を表１に示す。なお、イネに関してはダイアグラムにして図２に示した。また、イネ、ヨシ属、タケ亜科の各分類群の推定生産量と変遷について図３に示した。

４層～13層について分析を行った。プラント・オパールの含有量は全体に比較的低い値であった。このうち、イネは、５層、６層、13層において検出された。５層では比較的高い密度である。ヨシ属は、12層のみで検出されたが密度は低い値である。タケ亜科は、10層と11層を除く各層から検出されたが全体に低い密度である。ウシクサ族は、５層と13層下部において検出されたがいずれも低い密度である。キビ族は、検出されなかった。

5．考察

(1)　稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ3,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。

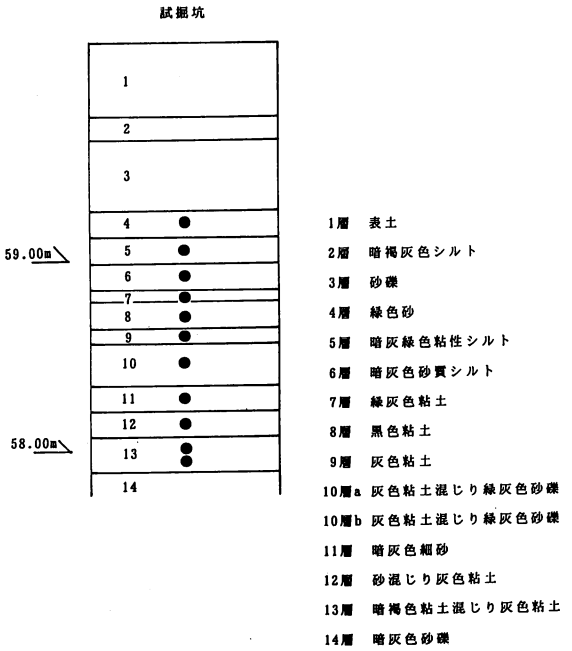


図１　土層断面図と分析試料の採取箇所

静岡県、矢崎遺跡

試掘坑地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾換算) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
4	90	14	1.00	0	0.00	0	2,300	0	0
5	104	14	1.00	4,300	6.27	0	5,700	700	0
6	118	15	1.00	700	1.15	0	700	0	0
7	133	6	1.00	0	0.00	0	3,500	0	0
8	139	13	1.00	0	0.00	0	4,200	0	0
9	152	8	1.00	0	0.00	0	1,400	0	0
10	160	22	1.00	0	0.00	0	0	0	0
11	182	13	1.00	0	0.00	0	0	0	0
12	195	15	1.00	0	0.00	600	600	0	0
13-1	210	9	1.00	1,300	1.27	0	1,300	0	0
13-2	219	9	1.00	500	0.55	0	1,700	500	0

表１　プラント・オパールの分析結果

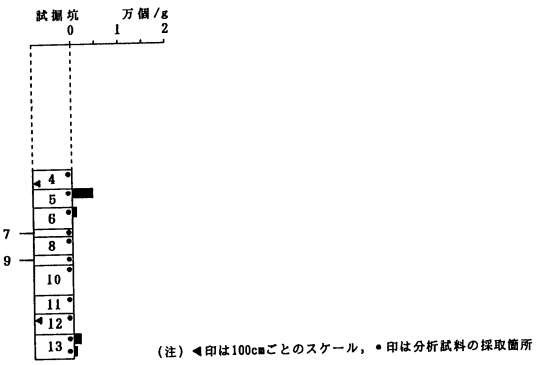


図２　イネのプラント・オパールの検出状況

以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

本地点でイネが検出されたのは、5層と6層それに13層であった。このうち、5層ではプラント・オパール密度が4,300個／gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。13層では、密度は1,300個／gとやや低い値であるが、直上の12層ではまったく検出されないことから、上層から後代のプラント・オパールが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に同地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。6層では密度が700個／gと低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

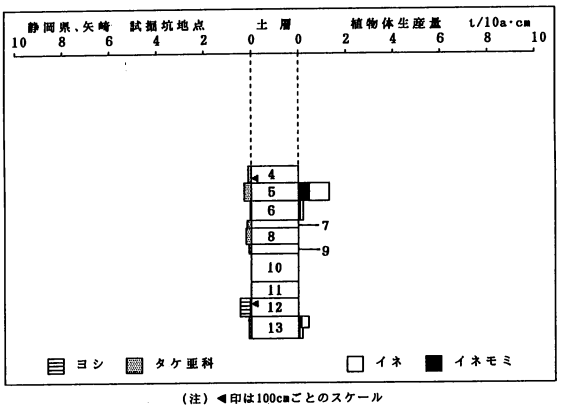


図3　おもな植物の推定生産量と変遷

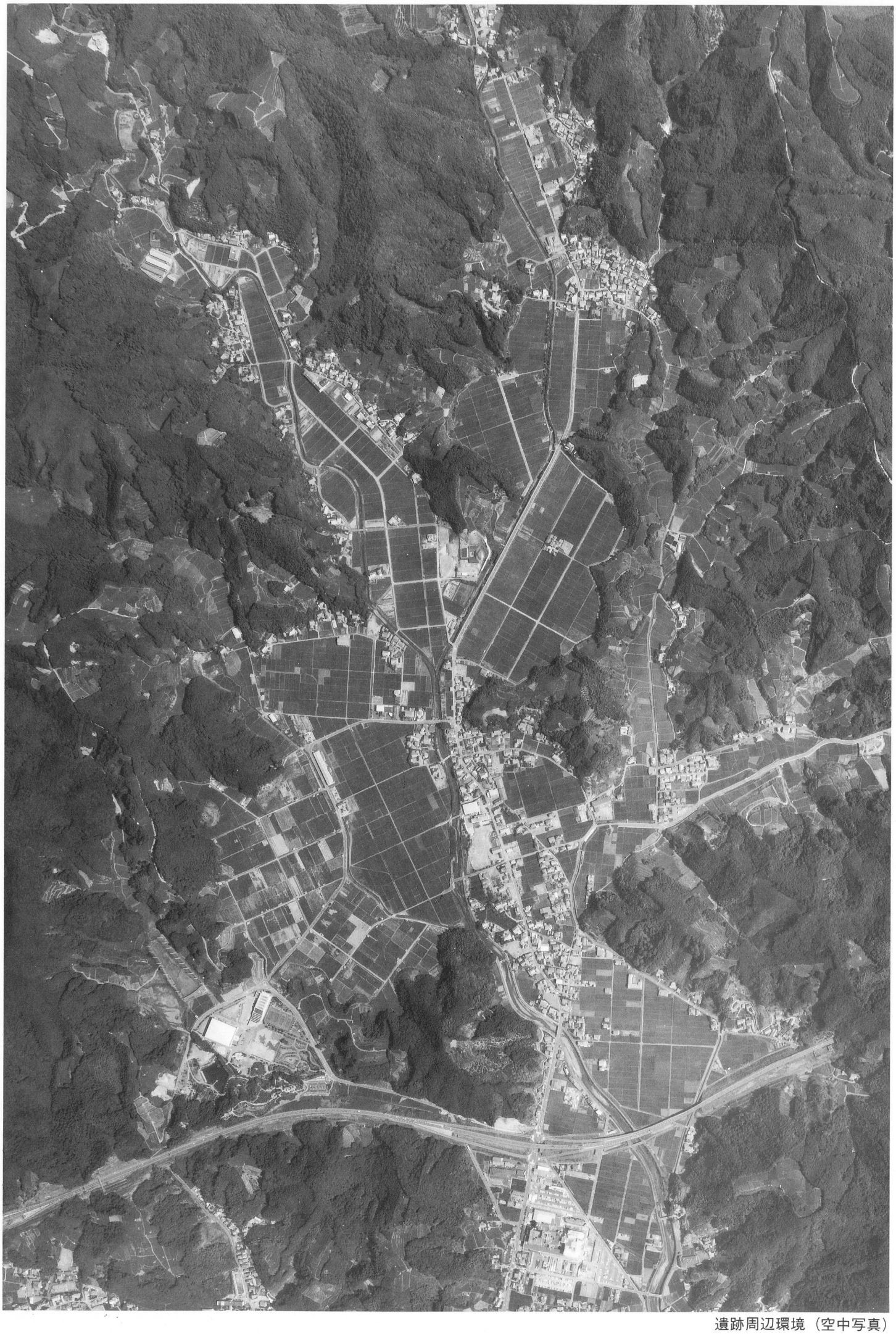
(2)　古環境の推定（図3参照）

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。

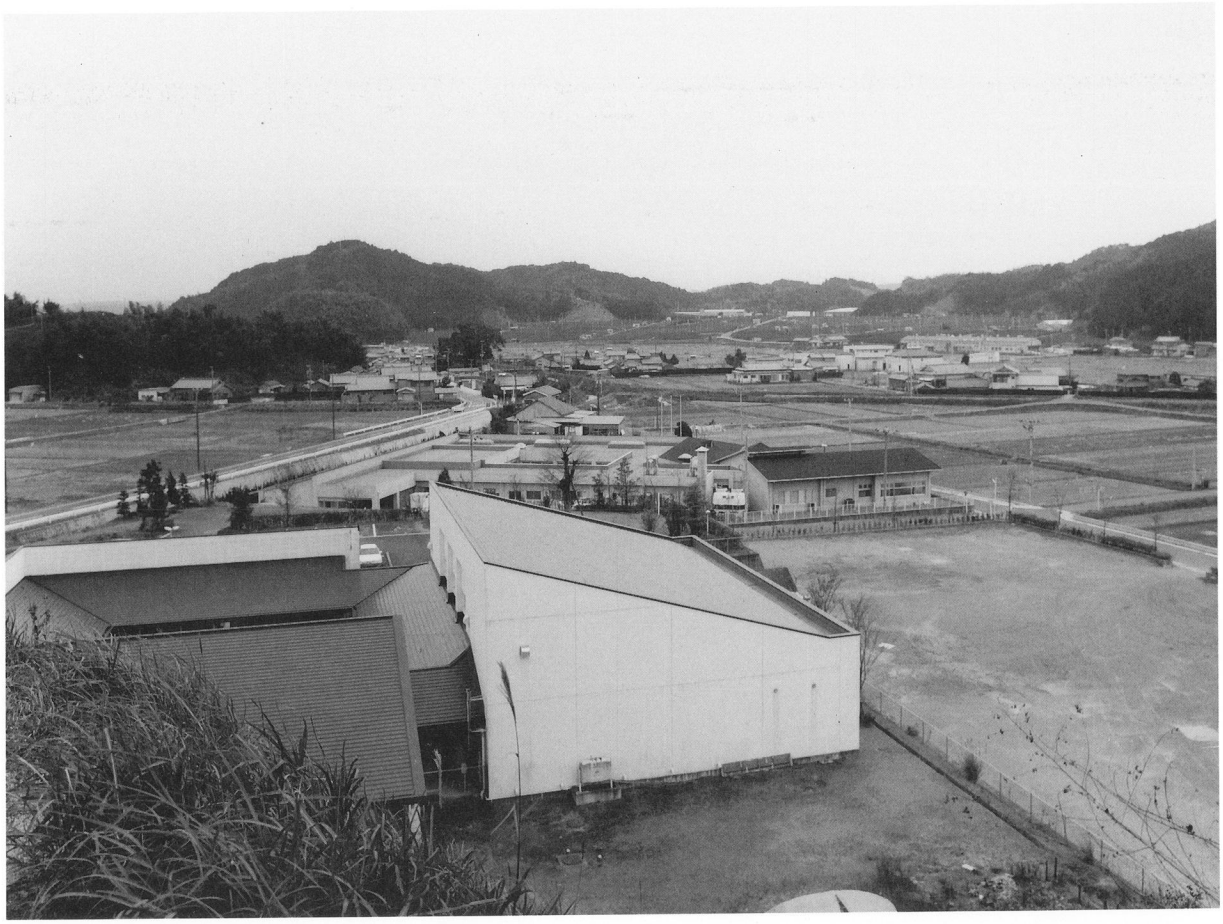
本地点では全体にタケ亜科が卓越しており、ヨシ属はほとんど見られない。このことから、本遺跡周辺は13層の堆積時期より現在に至るまでネザサ節やクマザサ属が繁茂するような、比較的乾いた土壌条件であったものと推定される。

6．まとめ　矢崎遺跡においてプラント・オパール分析を行い稲作跡の探査を試みた。その結果、第5層において稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、13層においても稲作が行われていた可能性が推定された。

図　　版



遺跡周辺環境（空中写真）

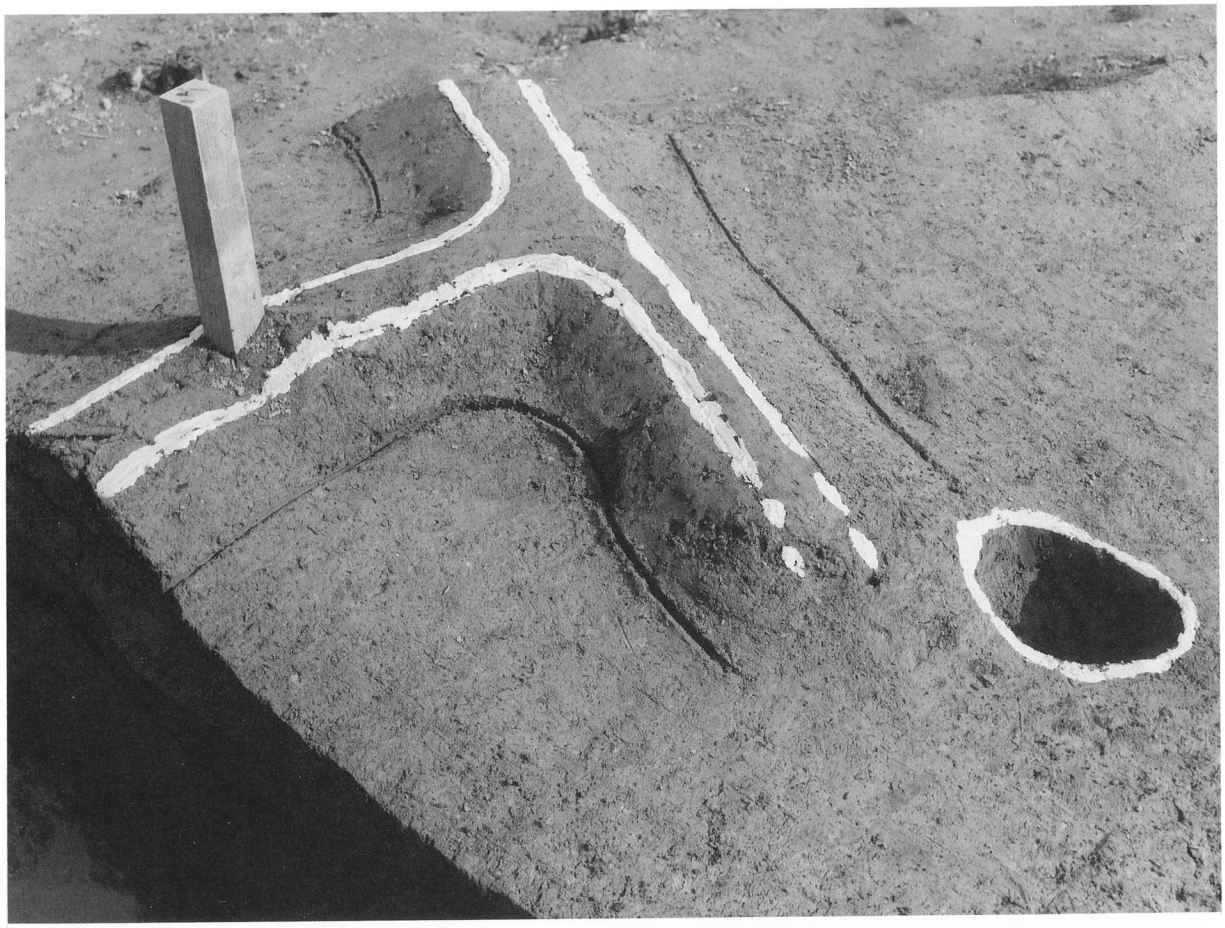


1　遺　跡　遠　景（北から）

2　遺跡調査前風景（南から）

1　ＳＤ０１土層断面（東から）

2　ＳＤ０２完掘状況（東から）



1　10層水田（第２遺構面）検出状況（南から）

2　12層水田（第３遺構面）検出状況（南から）

1　13層水田（第 4 遺構面）杭列畦畔解体状況（北から）

2　13層水田（第 4 遺構面）杭列畦畔解体状況　近接（北から）

1

2

3

1　中・近世遺物集合写真
2　小　　碗
3　小　　皿

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第54集

矢崎遺跡

平成５年度大津谷川単年災害復旧に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成６年３月31日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印　刷　株式会社　ニシガイ
清水市本町12－６
ＴＥＬ（0543）52－2188

報告書抄録

ふりがな	やざきいせき
書名	矢崎遺跡
副書名	平成５年度大津谷川単年災害復旧に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第54集
編著者名	鈴木正悟　中鉢賢治
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424　静岡県清水市江尻台町18－５　ＴＥＬ0543－67－1171～3
発行年月日	西暦1994年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
矢崎遺跡（やざきいせき）	静岡県島田市落合（しずおかけんしまだし おちあい）	22209	――	34度51分09秒	138度10分59秒	19930913～19931126	延540㎡	大津谷川単年災害復旧に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢崎遺跡	田畑	中世	畦畔　７条 溝　１条 小穴　１基	山茶碗 中近世陶器 杭	大津谷川中流域における中世の水田域を確認